

---

# 人魚のように

後藤詩門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人魚のように

### 【Zコード】

N4255E

### 【作者名】

後藤詩門

### 【あらすじ】

私が両足を失ったのは24歳の夏の頃だった……

「良し！ 念願のカジキが釣れたぞ」

釣りに興じて少年のように喜ぶ夫を見ながら、私は昔のことを思い出していた。

私の名前は新田みゆき。

両足が無い身体障害者である。

私が自分の両足を失ったのは、24歳の夏の頃であった。

理由は簡単、それは病院側の医療ミスのせい。

当時の私は大学を出たばかりのキャリアウーマンで、一流と呼ばれる商社に就職したこともあり、それなりに仕事に燃えていた頃だった。

でも、それがいけなかつたのだ……

仕事で無理をした私は、風邪をこじらせて入院してしまった。

そして、その同じ病院に重度の糖尿病患者がいた。

名前は純子。

たまたま一緒に病室で年齢も性別も同じ、ついでに血液型まで一緒。

だからそれなりに親近感は持っていた。

実は彼女、病気のため壊死してしまった両足を切断しなければならないという過酷な運命の持ち主であった。

ベッドの上でその話を聞いて、彼女と共に一晩泣いて過ごした事は忘れられない思い出である。

だが……

神様は悪戯好きだ。

次は私の方が同情される立場になるのだから。

残酷なことに、病院関係者のまつたくの手違いで、彼女ではなくこの私がその手術を受けてしまったのだ。

麻酔から目覚めた時には、まったく健康だった私の両足はもう無くなってしまった。

もものつけねからばつさりとである。

それからというものの……

病院側は必死の隠蔽工作を行なつた。

マスクコミには一切公表せず、私と家族を病院内に監禁状態にし、金の力で黙らせようとしたのだ。

一億、二億じやきかない現金が、私のベッドの上に積み上げられる。

それから、院長と執刀医が私たちに土下座。

頭を床に擦りつけながらこう頼み込むのであつた。

「どうかマスクコミにだけは黙っていてくださいませんか？ 私たちだけなら良い……でも他の病院関係者とその家族が、路頭に迷う事になりますから」と。

熱心なその頼みに、とうとう父が折れた。

一生涯、病院が私のケアをすることを条件に、世間に公表しない事を承諾する。

もちろん、しつかりお金も頂いた様子。

父曰く「お前のためだ」という事らしい。

母は悔し涙を浮かべていたが、内心では仕方がないといった感じ。私はと言えば、あまりの突然の事態に呆然とするだけ。

怒りも悲しみも、当時は（もつとも、後で腹も立つたし号泣もしたのだが……）何も感じなかつたのだ。

あの時、病院の院長が涙を流して感謝していたのを今でも思い出す。

まあ、こんな事が世間に知れたら間違いなくあの病院は潰れていったであろう。

彼の気持ちを理解できた。

一方、私の両足を切断した執刀医は何故か笑顔。

その笑い顔は誰の目にも奇異に映つたことであろう。

何故、笑う？

医療ミスを引き起こしたという自覚はあるのか？

その時まで呆然としていた私でも、彼の笑顔に少なからず違和感を覚えだし、後でかなり立腹もした。

だがそれは、私への医療ミスを世間に公表されないと知った安堵感からくる笑いではないと本人は言うのだ。

そうではなく、引き続き私がこの病院で治療を受けることになつた、安心感からくる笑顔だつたと語る。

新田義人、今の私の夫だ。

「しかし、そんなことよく覚えてたね？」

買ったばかりのクルーザーの船縁に持たれて夫が言った。

大きなカジキを取つて満足したのか、もう釣りはやめていく。

「君はあの時、夢遊病患者のように放心状態だつたなあ。まさか我々の話を理解してたとは驚きだよ」

照れたような、はにかんだ顔。

あの時と同じ、男の癖にえくぼを作る可愛らしい微笑みである。

これまでこの話題を避けていた私だが、大海原の中には解

放感のせいか、それとも彼が注いでくれたシャンパンのためかつい  
つい饒舌になる。

「確かに、あなたの笑い顔を見るまでは惚けてたわ。でも、あのあ  
と凄く怒つたんだよう」

私は潮風に揺れる髪をかきあげながら、おどけて言つた。  
無くなつた両足以外はすこぶる健康で、今も買つたばかりのハイ  
レグを身につけている。

もちろん、人目に触れることのない一人っきりの今だけの姿。  
サマーベッドにじろんと寝転ぶ私に、優しい視線を投げかけ彼が  
答える。

「いやあ、『ごめん、ごめん。あの時は悪かった』

相変わらず少年のような笑み。

「でもまさか、そんな君と結婚するなんて……不思議な運命だよな  
あ」

夫婦になつてもう4年。  
執刀医としての責任を感じたのか、義人は懸命に私に尽くしてくれた。

そんな彼の好意に私は感謝し、いつしか医師と患者の関係を超えて、  
二人は愛しあうようになつっていたのだ。

あつという間のプロポーズ。

医師としての彼の経済力も魅力ではあつたが、やはり私を動かしたのはその愛だ。

责任感だけで、身体障害者の妻をめとらう等と普通の男は考えな  
い。

義人は本当に私を愛してくれている。  
その事が入院中、ずっと感じとれたのだ。

両足を失つた私に、まともな縁談など来ないだろうと諦めていた  
両親だつたが、この展開には度肝を抜かれたと笑つた。  
父は「お前はラッキーだよ」等と本気で言ったものだ。  
母も「本当に良かつたねえ」と泣いて喜んでくれた。

去年の暮れに交通事故で亡くならなければ、この旅行にも一緒に  
これたのに……

二人は今、東南アジアを旅行中。  
長期休暇をクルージングで満喫していた。

シャンパンのせいか何だか眠くなつてきた。  
そんな私を見て、彼はまだ笑つている。  
優しい夫に見守られながら眠るのもいいかな……  
だけど、眠る前に一つだけ聞いておきたい事があつた。

「ねえ、あなた。何であんなに医療道具を持つてきたの？」

眠りを堪えて不思議そうに尋ねる私。

この船には外科医である彼の仕事道具、つまりメスやら麻酔やら  
がたくさん詰め込まれているのだ。  
いざという時のためにしては大袈裟なくらい……  
私の質問に彼が答えてくれた。

「言つたことなかつたかな？ 僕は人魚に憧れてたんだ。子供の頃  
からずつとね。幸い君の両親は死んで君は天涯孤独の身になつたこ  
とだし、そろそろ良いかと思つてね。実を言えば君の両足はこの日

を夢見て僕がわざと切つたんだ。本当はあの純子つて子を狙つてた  
んだけど……彼女は重度の糖尿病で長生きしそうになかつたからね」

だが、嬉しそうに彼が語る時にはもう、彼の瞳には眠りについた  
私しか映つていなかつた。

「さあて、早くあのカジキを解体しなくちゃな。人魚の尻尾にする  
んだ」

義人がぼそつとつぶやいたのを、夢現の中では聞いたような気  
がしていた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4255e/>

---

人魚のように

2011年10月4日20時10分発行